

# われらが 父たちの掟

下

THE LAWS  
OF OUR  
FATHERS  
SCOTT  
TUROW

スコット・トゥロー  
二宮 馨 訳

われらが  
父たちの徒

江蘇工業学院図書館  
蔵書章

スコット・トゥロー

二宮 碧 訳

文藝春秋

THE LAWS OF OUR FATHERS  
BY SCOTT TUROW  
COPYRIGHT © 1996 BY SCOTT TUROW  
JAPANESE TRANSLATION RIGHTS RESERVED BY BUNGEISHUNJŪ LTD.  
BY ARRANGEMENT WITH  
BRANDT & BRANDT LITERARY AGENTS, INC., NEW YORK  
THROUGH TUTTLE-MORI AGENCY, INC., TOKYO  
PRINTED IN JAPAN

われらが父たちの掟 下

一九九七年六月一五日第一刷

著者 スコット・トゥロー

訳者 二宮啓

発行者 新井信

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三―二三

電話〓〇三―三二六五―二二二

印刷所 凸版印刷

製本所 加藤製本

万一、落丁・乱丁があれば送料当社負担でお取替え  
いたします。小社営業部宛お送りください。  
定価はカバーに表示してあります。

ISBN4-16-316990-3

われらが父たちの掟  
下

装帧  
坂田政则

目次

第一部 告発  
(上巻)

第二部 証言  
(上巻よりつづく)

7

第三部 判決  
261

訳者あとがき  
433



第二部 証言（承前）

主な登場人物

現在（一九九五—九六）

ソニア（ソニー）・クロンスキー……………キンドル郡中央裁判所判事  
セス・ワイスマン……………コラムニスト

ホビー・タトル……………ナイルの弁護士  
ロリエル・エドガー……………州上院議員

ジューン・エドガー……………ロリエルの別れた妻  
ナイル・エドガー……………保護観察官 ジューン殺害  
事件公判被告人

ルーシー……………セスの妻

ハードコア（オーデル・トレント）……………暴力組織（T4ローラース）  
のリーダー 共同被告人

バグ（ロヴィーニア）……………ハードコアの手下  
ジャクソン・エアーズ……………ハードコアの弁護士

トミー・モルト……………検察官  
ルディー・シン……………同右

マリエッタ・レインズ……………裁判所書記官  
バーンハード・ワイスマン……………セスの父

一九六九—七〇

学生

ソニーの恋人

ナイルのベビーシッター

セスの幼馴染

反体制運動リーダー

大学神学部教授

ロリエルの妻

エドガー夫妻の息子

ホビーの恋人

一九九五年十二月九日

## ソニー

ニッキとわたしのユニヴァーシティ・パークの住まいは、改装をほどこした、灰色火山岩の手狭な建物だ。地下室を改造してガレージに仕立て、冬、雪が解けたときに備えて、車道は外へ向かって下り勾配をつけてある。上階の上げ下げ式の高い窓の下に壁から迫り出した石灰岩の棚には錬鉄製のフラワーボックスが置いてあり、秋のゼラニウムがいまはテラコッタの鉢のなかで萎れている。チャーリーとわたしはぜひぶん高い買物をしてしまった。次へ進むためにはまずここを売って、とよく考えるのだが、こちらが必要とする金額では売れそうにない。わたしが考えるのはイースト・バンクの郊外で、そのあたりにはお金のかかった、しっかりした公立の学校があるし、街路樹の並ぶ閑静な町並みも魅力的だ。ニッキといっしょに保育園へ通いはじめた子供を持つ家庭のうち、すくなくとも四分の一はより安全な環境のそのあたりへ引っ越してしまった。だが、引っ越しを考えるたび、ゾラの声が聞こえる。「郊外だって！」と、母はよく声を張りあげた。「ロボットミイ手術を受けるほうがいいね」

今日、土曜の午前中はなにかと用が多い。ニッキは朝食はホットケーキがいいと言いだす。食

べ終ると、次は漫画の時間。車を修理に出さなければならない。またオイルが洩れ出し、ガレージの床に黒っぽいグレーのちらちら光る油の溜りができているのだ。ボイス修理工場へ車を預け、二人とも不機嫌な顔で歩いて帰る。わたしは、働く女の苦役である土曜の食料品買い出しを車なしでどうしたものかと苛々し、ニッキはニッキで、家へやってくることになっているチャーリーの息子、サムと会えないのではないかと心配している。サムは「豆の上に寝たお姫様」を見せに、妹をドリーズ・セクターへつれていくことになるのだ。

別れるときにはチャーリーのことよりサムのことのほうが心配だった、とわたしはよく言っている。彼はまだ幼児のころから、週末はいつもわたしたちといっしょに過ごした。彼は特別な子だ、わたしにとってはとくに。わたしは彼と長くつきあったからこそ、母親としてやっていけると自信を持てたのだ。彼がその成長過程で、自分はこの地上の誰とも変わらない人類の一人であると証明してくれたおかげで。サムの生母であるレベッカは、十年後のいまも、彼女の家庭を崩壊させた元凶として、わたしを蔑み、わたしに対してはぴんと神経を張りつめている。チャーリーと別れたからには、サムがわたしの家へやってくることは彼女がまず認めないだろうと思った。だがサムはどんな変化も許さなかった。彼は週にすくなくとも一度、ニッキに電話をかけてくるし、土曜の午後はたいてい、数ブロック離れたところにある母親の家から自転車飛ばしてやってくる。わたしが使いに出ているあいだ、彼はかつてにはいつて、自由にしている。子供二人で食べるおやつもつくる。二人してファミコンで遊ぶ。覗いてみると、ニッキが彼の片膝に乗かって、おなじようにぼかんと口をあけて画面を見つめていることがある。

これは大いなる謎だ。レベッカみたいなつむじ曲がりの許でどうしてこんな男の子が育ったのだろうか？ 彼は明るくて面白い子で、いわゆる男気の持主でもある。彼は情感をこめてピアノを弾く。劇もうまい。まだ十二歳なのに情操がとてもゆたかで、それほど意外なことではないが、

痛みもいっぱい抱えている。なんといおうと、彼はやはりレベッカの子、気むずかしくて、人を傷つける口の持主であるレベッカの子なのだ。もつとあいにくなことに、チャーリーには見捨てられた。彼がニッキに強く執着するのは、ただ血だけではなくその環境によって、たんにチャーリーからおなじ遺伝子を継いだからではなく、激しい愛慕の気持でニッキと結びついているからではないかと思う。わたしはよく考える、サムは、ニッキによくしてやることで、父親が二人に對してしてくれたよりずっとよくしてやることで、自分を癒そうと決めたのではないかと。

今日のサムは、もう窮屈そうになった、冬用のパーカを着てやってくる。チャーリーはレスリングをやっていたくらいだから大きかった、背はそれほどでもないが、横幅が。サムもおなじ大男になりそうな兆候が早くも見える。スポーツ好きで、同年齢のたいていの子たちより運動神経が発達している。思春期の初めに特有の、手や脚がひょろっと伸びすぎたような印象はあるけれど。髪は黒く、とてもハンサムで、自分の美貌を無邪気に喜んでいる。最近は櫛を持ち歩くようになり、鏡の前を通るたび、自分の姿を覗いている。

出ていく二人を見送ろうとドアをあけると、びっくりしたことに、敷居の向こうにベルに手を伸ばしかけたセス・ワイスマンの姿がある。わたしとおなじようにジーンズ姿で、襟にボアのついたボマージャケットを着て、つばの広いオーストラリアン・ハットをかぶっている。彼も頭にかぶるものに凝る禿頭族の一人らしい。わたしに言わせれば、それは間違いだ。帽子をとったときよけいショッキングなだけだから。

「ニッキ、こちらはママのお友達のミスター・ワイスマンよ。で、この子はニッキのお兄さんのサム」わたしはニッキのかわいいところをよく見てもらおうと、ボア付きのフードの首許をゆるめてやる。セスはニッキのかわいさをほめそやし、サムにも気をつかってちょっと言葉をかける。わたしたち二人は言葉もなく、出かけていく子供たちを見まもる。二人は夢中でなにか話しながら

ら、改装された建物が並ぶ街路を歩いていく。たくさんの家がクリスマスの電灯飾りできれいに装っている。例によってニッキは棒切れを拾って、錬鉄のフェンスに打ち当てて引きずりながら、リズミカルに鳴らしていく。

「子供には親を捨てることをちゃんと教えろと言うわね」と、やっとわたしが口にする。

「でも、親は決して子を捨てられない」と、彼は応じる。その目がちらつと伏せられたのに気づき、わたしは自分の舌を呪う。それから、ちよつと引っこんで厚手のコートを取ってくる。とりあえず玄関まではいったら、と勧めるのだが、彼は敷居をまたごうとしそうにない。

「もう目的は果たしたんだ」と、彼は言う。「とっても素敵な子だよ。それに、これから父のそこへ行かなきゃならない。本日の重大事の処理に。父の車が盗まれたんだ。一九七三年式のカプリスなんかを乗りまわすのはもうよせと、何年ごしかで言ってたんだけど、どうやらあの代物もヴィンテージ・カーとしての収集対象になったらしい」

わたしは、うちのミニヴァンが盗まれてもちつともかまわない、それで保険金はいって、年じゅう修理依頼の予約を取りつける必要のない車を買うのなら、と打ち明ける。

「どこかへ車で行く必要があるの？」と、彼が訊く。

「ちよつとヘグリーン・アースまで」とりあえず、手に持てる分量だけでも買いに行くつもりなのだ。来週は一晚ベビーシッターを頼んで、たとえ二人家族といえど、相当な量になる買物に行かなくてはならない。近ごろでは夜の十一時でもかなりの数の買物客がいるのはいっつ行っても驚かされる。

「フォース・ストリートの北の？ 父のそこへ行く途中だろ？ 行こう」彼は丁重だが強硬で、わたしとしては断わっていいものかどうか知らない。レンタカーのカムリのなかで、セスはもっぱら無駄な時間をつくるまいという意識から、神経質に次々と話しつつづける。まるで、自分の

決心がくじけつつあることにわたしが気づいていないとでもいうみたいだ。彼はユニヴァーシティ・パーク界隈の風景をいちいち指差してみせる……彼がバスケットボールやテニスをおぼえたフィリップス・プレイグラウンドを、ホビーが通った小学校、セント・バーナードの、ブロックの四分の一を占める灰色火山岩の巨大な建物を。

店の駐車場はぎっしり埋まっている。駐車を待つ車が六、七台並んでいて、買物を済ませた客の大群がカートを押しながら、車のあいだを縫って動きまわっている。わたしたちの車はなかにはいりきれなくて大通りに立ち往生してしまい、じきに後方で数台の車がけたたましくクラクションを鳴らしはじめる。わたしが降りようとすると、セスが手をあげてとめる。

「ほんのちよつとうちの親父に我慢してつきあえるかい？ あとでいっしょにここへ来るよ。ルーム・サービスの食事にはほとほと飽きてるんだ。買物をしたら、また送っていくよ。袋を抱えて帰らなくて済むじゃないか」

そうすれば一週間分の買物ができる。また来なくていいし、その分、甘美な時間が持てる。それに、かつてはわたしたち若者の目には鉄の獅子と映ったミスター・ワイスマンの老いた姿を見てみたいという気もする。

「これは贈賄ね」車が走りだすと、わたしはセスに言う。二人して笑うが、わたしのほうはそう呑気な気分でもない。楽しむのはここまでと自分なりの限界を設けている。だったらかまわないではないか？ しかし、並みはずれて秀れた裁判官は自分の裁定をめったに変えないものだ。間違っていたら上の裁判所が教えてくれる。それが教訓ではあるけれども。

セスの父親は、昔からわたしの頭に「キンドル郡の平屋」として思い浮かぶ家に住んでいた。よその土地で似たような家を見たことは一度もない。茶色い煉瓦壁に寄棟屋根の、唐傘葺を建物にしたような一階建てで、ステンドグラスがあり、二〇年代に流行ったアールデコ様式の特徴が

見られる。二〇年代には、こうした家がトライ・シティーズじゅうに文字どおり何千軒と建てられ、教会や学校や商店街を中心に置いて放射状に拡がる街をつくった。それはキンドル郡では集合住宅と同義語であり、地道な仕事で一家を養ってゆく労働者階級の住まいなのだ。オークの玄関ドアは厚くニスが塗られ、これ見よがしに錬鉄のノックカーと格子の嵌まった小窓が付いている。そのドアが開いて、長身の若い女が現われる。わたしがいやでも年齢を意識させられる、今風の恰好をしている。形のはっきりしないヴェストに、秋らしい色の、流れるようなプリントのスカートをはき、コンバットブーツに似た靴の上に黒いアンクレットを留め、スカートとブーツのあいだから、毛を剃ってない下肢がのぞいている。セスはすぐさま彼女を抱き締める。

「おまえに会えるとは思わなかったよ」

「ついでに寄ってみたの。これからフィルに会いに博物館へ行くところ」

「挨拶するぐらいの時間はあるだろ」セスが、これは娘のサラで、イーストンの最上級生だと紹介する。

「こちらはクロンスキー判事」とセスが言うので、わたしはすぐに「ソニーよ」と訂正する。

サラは背が高く、若さゆえの生きいきとした美しきで輝いている。その痩せぎすの体型から察するに、長身の娘にとつては辛い仔馬の時期を、手が肩からどんどん遠く離れていきそうで、背丈はどの男の子よりも四インチは高い、という憂鬱な時期を、そう遠くない過去に経験したのではないかと思える。色合いのゆたかな茶色っぽい髪は肩まで伸ばしている。彼女の背後の、古い家屋のなかの居間はぼんやりと薄暗い。いまは流行らない緑がかった色の、すり切れた東洋製の重たげなローシルクのカーテンと、もっと古ぼけた、傷んだチッペンデル風の家具が見える。二十五年まえに、一、二度、訪ねてきたことがある。こうした風景はほとんど記憶に残っていないけれど、細部の一つまで変わっていないことはまず確かなように思える。サラはコートをはお

り、バックパックを背負う。

「あの人、ベルが鳴るの聞いてるわ。パパを待ってるの。もういっぺん警察に電話してほしいんだって」

「まいったな」セスはそう口にし、父親は変わらないか、と不機嫌な声で訊く。

「ないわ」と、彼女は答える。「食料品は買ってきたわ。それから、請求書もまとめておいたから」

「おまえは感心だ。この子は聖者だよ」セスはわたしに向かって言う。「親父にはもったいない」「どうしていつもそう言うの？」

「真実は防衛なり。それでいいんだろ？」彼はわたしに訊く。「新聞社のニュース欄編集室ではそう言ってる」

「告発の内容によるわね」と、わたしは答える。

サラは小さな口をぎゅっとすぼめる。「あの中は老人なのよ」彼女は父親にキスする。「やさしくしてやって」サラはそう言うのと、ロングヘアをきつと払ってパーカの上に出し、家を出ていく。わたしはふと気づき、こらえきれず微笑<sup>わら</sup>ってしまう。

「なんだい？」とセスが訊く。わたしは首を横に振るが、彼がしつこく迫るのでどうとう答える。「彼女の髪、あなたとおなじよ」

「ひどいな！『やさしくしてね』とこっちがいいたい」

わたしたちがまだ笑いあっているうちに、ノッカーがカタカタと鳴る。もどってきたサラが、警察の車が来ていると告げる。セスは彼女に、わたしの相手をしてくれ、と言う。わたしは、かまわないから出かけて、と言うが、第一子として生れたサラは大人の振る舞いをよく心得ているし、喜んでそこに残るつもりらしい。彼が出ていくと、サラはわたしに、これからどうするんで

すか、と訊く。

「これから？」わたしは、買物のつもりがこういうまわり道をする羽目になったいきさつを説明する。

「まあ」彼女はかわいらしく唇を嚙む。「わたし勘ちがいしてたみたい。このあいだの夜ホビーおじさんが言ったことを誤解したのね」サラは薄暗い宙に指で円を描く。「二人は噂になるような関係ではないのよね？」

「あなたのお父さんとわたしか？」わたしは声をあげて笑う。が、そういう誤解がなぜ生じたかに気づく。「つきあっていたの」わたしは控えめな言い方で話す。「むかしむかしにね、あなたのご両親がいっしょになるまえのこと」

「まあ」サラはまたそう発し、今度はかすかにほほえむ。「わたし、ほんとに両親のことで悩んでるんだと思う。なんだか妙よね、自分の親を友達みたいに考えなくちゃいけないなんて」

わたしはそれを聞いて、初めは、セスとルーシーと彼女の関係は親密すぎるくらいだ、という意味だろうと解する。ニッキはまだわずかに六歳だ。だがわたしは早くも、自分も同年代にたくさんいるピーター・パンの一人になるのではないかと危惧している。つまり、われわれの世代は、権威に抵抗する者とはつきり定義された結果、自分の子供に対してしっかりした役を演じきれない、というのだ。わたしはそういうやり方で育てられた。八歳か九歳のころでも、ゾラはわたしを友達のように扱った。わたしにはそれがともうれしかった——母を名前で呼んだり、その悩みを聞いてやるのが。だが、二十代になると、だまされていたような気がしてきた。進む道に、ほかの若者たちはうまく曲がるのに、わたしには曲がれない角があるのだ。そこでやっと気づく、サラが言っていることはちがうのだと……セスとルーシーは、情けないことに二十代の若者とおなじ不確定さと向きあっている、というのだ。